



P.42
エスニック

P.48
宗教

P.54
コラム：オードリー・タン

P.56
ジェンダー

先住民族から新住民まで 多様なエスニック・グループ

—案内人—
横田祥子

台湾の住民は、2022年現在漢族が96.42%を占め、16族からなる台湾先住民族（原住民）が2.48%、中国大陸出身の少数民族やマカオ出身者並びに外国人が1.1%を占めている、というのが台湾政府の公式統計にもとづく構成である。

17世紀以降、漢族が福建省から移住する以前から、台湾には先住民族諸族が居住していた。彼らの言語は「オーストロネシア語族」に分類され、フィリピンやインドネシアの人々との共通点が見られる。1871年、台湾南部屏東に漂着した琉球漂流民が、地元の先住民族に殺害されるという事件が起き、明治政府は加害者の討伐を口実に、1874年台湾に兵を出した。日清戦争を経て、台湾は1945年まで日本の植民地となった。

先住民族は民族ごとに、社会組織の特徴が異なっている。たとえば、ブン族、ツォウ族、サイチャット族は、父系制をとっており父方の祖先のつながりを元にした親族集団がある。他方、アミ族には母系制の傾向がある。財産は母から娘へと継承され、夫の立場が弱いと言われている。ほかに、パイワン族ヤルカイ族には、貴族層・平民層に分かれる身分制度がある。そして、プユマ族、アミ族、ツォウ族は、年齢ごとに区切った「年齢組織」が発達しており、男子だけの集会所を有している、などの特徴が見られる。先住民族の文化は、圧倒的マジョリティの漢族の影響を受けつつも、伝統的な社会組織が強固に人々の行動を規定する側面が見られる。

一方、漢族系住民は、大きく「閩南人」（河洛人）と、相対的に少数派の「客家人」に分けられる。閩南とは、福建省南部のことを指し、台湾には福建省泉州府からやってきたグループ「泉州人」と、同省漳州府からやってきた「漳州人」グループがあった。両者の言語には、差異が見られ、台湾に来到した当初は出身地ごとに団結し、抗争が繰り返されていた。

閩南人の祖先は、台湾西部の広い範囲に居住した。清朝は移民が家族を連れて移住することを禁止したため、男性たちは台湾西部に住んでいた先住民（平埔族）の女性と通婚し子孫を残した。これにより「有唐山公、無唐山媽」（中國から来た爺さんはいるが婆さんはいない）ということわざが生まれた。

客家の祖先は、広東省東北部、福建省西北部の山間部から台湾に到来し、台湾中部から北部にかけて居住したが、今日では桃園市の一部、新竹県、苗栗県、台中市の内陸部、雲林県の一部、花蓮県の一部に多くが居住している。台湾の客家語は、「四縣」「海陸」「大埔」「饒平」「詔安」に分かれおり、地域により使用する方言が異なっている。

さて、台湾にはこのほかに「外省人」「本省人」という区分がある。第2次世界大戦以前から台湾島に住み、かつてあった「台湾省」を本籍地とする本省人に對し、外省人は、本籍地が台湾省ではなく、1949年国共内戦に敗れた国民党に追随して台湾にやってきた人々である。外省人は、国民党の関係者で、公務員・軍人・教師になる人が多かった。かつて外省人は「眷村」と呼ばれる外省人の集住地区に居住した。眷村でのかつての暮らしあり、台北101近くにある「四四南村」などで再現展示がされているので、ぜひ見学していただきたい。

以上の先住民族・閩南人・客家人・外省人の4グループは、台湾で「四大族群」と呼ばれている。「族群」とはエスニック・グループを中国語訳したものだが、台湾では政治的な集団や、社会集団を指して用いられており、汎用性が高い。この「四大族群」の民族的・集団意識は、もともとあったが、1980年代の政治運動の中で高揚した。

1980年代、国民党政府の民意を無視した政策決定、威圧的な統治に対し、さまざまな社会運動が起こった。戦後初めての野党「民主進歩党」は、台湾ナショナリズムの構築を主張した。台湾ナショナリズムとは、台湾という土地



横田祥子 よこた・さちこ
滋賀県立大学人間文化学研究院准教授

専門分野は台湾一インドネシアの移民や家族、宗教と民族間関係について。22歳、アミ族の豊年祭（収穫祭）で初めてビンロウを噛み、完全にノックアウトされてから、台湾の多様な人々との関係が始まりました。アミ族の政治家一家、漢族名からタイヤル族名を名えた親友、何種類もの客家語を操る親友、家族に反対されながら日本に留学してきた外省人の青年。そして若くして台湾人と結婚した勇敢な新移民の女性たち。それぞれの歴史・文化を背負った人々の思いに触れ、私は台湾を知り、世界を知った気がします。

主な著書
・『家族を生み出す——台湾をめぐる国際結婚の民族誌』春風社、2021年

ラジオ・テレビ番組の放送や、二言語教育の実施などを要求した。

こうした運動の結果として、とくに先住民族と客家の文化については、文化の保持と発展を促進する政策がとられている。小中学校では「本土語言教育」として地域の特徴に応じて、閩南語や客家語、先住民族語を教えるようになり、公共交通機関や公共施設では多言語での放送・表記がなされるようになった。また、先住民族や客家人を対象とした番組を制作・放送するテレビ局も開局している。先住民族の文化をテーマとした野外博物館としては、屏東県の「原住民族文化園区」があり、各民族の伝統家屋の復元を見ることができる。客家文化をテーマとした博物館、展示館は数多く設置されているが、中でも苗栗県の「台湾客家文化館」、屏東県の「六堆客家文化園区」は見どころが多い。

さらに2000年代以降、「四大族群」に加え、台湾人と国際結婚した外国人女性と子どもたちが、「第五の族群」あるいは「新住民」と呼ばれるようになってきた。国際結婚配偶者数は、先住民族人口を超えていて、民族別統計では彼女たちの存在は把握しにくい。新住民到来の背景については、次ページからの書籍の紹介をお読みいただきたい。

2000年代に入るまでに、台湾アイデンティティを模索する中で、多様なエスニック・グループの意識も高揚した。さらに新たな結婚移民と子どもたちが加わり、台湾の住民はますます多様化している。どのような「台湾人像」がつくれていくのか、今後も目が離せない。

に愛着を持つ人は、みな、台湾人であり、本省人・外省人の区別なく団結し、抑圧者である国民党に対抗しようというものであった。そこで、祖先の起源や台湾の言語・文化を重視し、二・二八事件という外省人と本省人の対立を決定的なものにした事件を見つめ直すとともに、台湾人として団結していくことがうわれた。

そこで、外省人と本省人の「省籍矛盾」が問題視された。外来の少数民族であった外省人は主要な政治ポストを占めており、台湾を中華文化の拠点とすることを主張してきた。一方、民進党は、台湾本土の歴史や文化が抑圧されてきたと主張し、本省人の「族群意識」の高揚へつながっていった。他方で、外省人の若い世代にも、台湾人としての意識が浸透していく。

先住民族は「四大族群」と、第2次世界大戦後、政府の同化政策によって、伝統文化が衰退した。また先住民族の青年は、出身村落を離れ、都市へ移動すると、労働市場の底辺に編入されていった。教育は、漢族主体の教育内容であり、加えて先住民族地域の教育環境は不十分であった。教育の不平等・格差は、経済格差に影響し続け、2022年現在でも漢族との差は埋まっている。

1980年代、先住民族は、中国式姓名の強制、母語の喪失、伝統的祭典・慣習の衰退、伝統的な社会制度の瓦解などにより、民族アイデンティティ存続の危機に直面した。そこで諸族が先住民族として団結し、文化復権運動を展開した。運動の結果、1994年には「原住民族（先住民族）」としての地位が憲法に明記された。また、從来9族が法定民族として認定されていたが、2000年代以降、7民族が新たに先住民族に認定されている。

漢族の中のマイノリティである客家人も、1980年代、台湾アイデンティティを模索する動きの中で、客家語の衰退や文化喪失の危機感を募らせた。そこで台湾全土の客家人が協働し、「母語を返せ」運動を展開し、客家語による

『家族を生み出す』 台湾をめぐる国際結婚の民族誌

横田祥子

春風社 2021年 ¥3,960
ISBN: 9784861107092



本書は、台湾の国際結婚現象とその家族について、台湾とインドネシアでのフィールドワークを元に描いたものである。手前味噌で恐縮だが、筆者自ら本書を紹介させていただく。

2003年、私が2度目の台湾留学を始めた頃、台湾では国際結婚現象と外国人配偶者の社会統合が一大関心事となっていた。結婚がライフスタイルの問題になりつつある一方で、「男子を残し祖先祭祀を継承する」と(伝宗接代)が依然重要視されており、結婚はその要請を実現するための大前提でもある。そこで、1980年代以降、東南アジア諸国出身の女性を台湾人男性に引き合わせる仲介ビジネスが成長した。

しかし仲介ビジネスの非人道性が指摘され、結婚移民女性への差別が深刻化すると、国際結婚現象は、女性や移民の人権や教育、新住民を含めた多文化主義の問題として、広く議論されるようになった。しかしこうした「政治的な正しさ」と異なる次元で、人々は国際結婚をとらえているのではないかと私は考え、結婚の際に交わされる贈与の内容や儀礼に着目し研究を行なった。また、夫婦が互い

の出身家族に求める貢献をいかに交渉しつつ、家族を保っているかを描いた。

本書の後半では、結婚移民女性の出身社会のひとつ、インドネシア西カリマンタン州シンカワン市でのフィールドワークにもとづき、女性送り出しの系譜を記した。1960年代末に起きたエスニック・コンフリクトにより、現地華人社会は多数の難民を抱えていた。1970年代末になると、寡婦や離婚した華人女性が、台湾の外省人退役軍人と結婚するルートが開かれた。そして国際結婚へのニーズが高まるにつれ、初婚の若年女性が台湾へと渡った。事例から、現地では結婚が有力な生存戦略であり、台湾などへ移住した女性が、長期にわたって出身家族を経済的に支えていることがわかる。

近年、結婚移民と子どもたち「新移民」は、東南アジアとの経済緊密化を進めるうえで、「東南アジア人材」として看されている。台湾の多文化主義の行方を見守るうえでも、「新移民」の動向に注目していきたい。

本書は、1871年に琉球の乗船員が台湾南部の先住民族に殺害された「琉球民遭難殺害事件」と、その事件を口実にした1874年の台湾出兵について、関係者未裔への取材と歴史史料を元に書かれたものである。事件から約150年、まだ「和解」を求める人々がいるのかとまず驚いた。そしてそれは可能なのだろうか。本書は、人々の思いと和解をめぐるロードムービーのような1冊である。

1871年10月、漂流民らはパイワン族の村落にたどり着いたが、言語・文化面での誤解のためか54名が殺害され、一部は漢人に救助された。その後、漂流民の遺骨は、屏東県車城郷の「琉球墓」と那覇の護国寺に埋葬された。

時代が下り2005年、パイワン族の遺族らが宮古島を訪問し、遺族に謝罪した。パイワン族のマバリウ・バジクロさんは、語り部となり研究者の支援を行なってきた人物である。彼は事件の関係者の未裔であり、和解を進める責任が自分にあり、それが自分の運命であると考えていた。こうした人物のほかにも「和解の旅」の背景には、集落の歴史を先住民族自身が再構成しようという動きが盛んになって

いたことが挙げられるよう。

しかし、2011年牡丹社事件紀念公園の説明板の記述をめぐり、牡丹郷と宮古市や遺族との間で対立が起きてしまう。遺族の怒りは、祖先の死が台湾出兵に利用され、先住民族に多大な被害が及んだこと、にもかかわらず新たな説明板では、琉球漂流民と台湾出兵をした明治政府とを同一視していることから来るものだ。

本書で描かれる日台双方の遺族の事件に対する向き合い方、歴史認識は、公式見解でも通説でもなく、それぞれ誠実な歴史の探索から醸成されたものである。日台交流において、「既成のストーリー」に乗っかり歴史を心地よいものとして読み替えていないか、痛みを受け止める用意があるのかが、私たちに問いかかれている。

『牡丹社事件 マブイの行方』 日本と台湾、それぞれの和解

平野久美子

集広舎 2019年 ¥2,200
ISBN: 9784867350102



『台湾客家スケッチブック』 客家の人々と暮らしにふれる旅

小池アミイゴ/台湾客家スケッチブック編集部・編
KADOKAWA 2022年 ¥1,760
ISBN: 9784041121276



本書はイラストレーターの小池アミイゴ氏が、「台三線客家ロマンチック街道」という台湾西部の山間地域を南北に貫く幹線道路沿いに、客家の町を訪ねる旅をして、旅で出会った人・コトについて絵と文で記したものである。「生きづらさを感じちゃってる人の心に風穴を開け」(P.19)ることを目指して書かれた、ほのぼのとした客家ガイドブックである。

本書の魅力のひとつは、柔らかな色彩で描かれる絵である。P.70やP.96で描かれた客家の町の商店街や廟は、実際に赤が目立つ極彩色なのであろうが、とても優しげな風景として描かれている。また、彩色されていない人物の絵も、人々の温かい関係を表す一瞬を切り取っており、私のお気に入りである。

著者の紀行文もまた大きな魅力である。旅の冒頭、「大量に浴びた客家の文化らしさものの情報と出会いう会いにかけられる情とで、ボクの心はもはやずぶ濡れ」(P.33)という文がつづられている。「これぞ我が町の誇り」「これぞ客家文化」として、客家の人々が次々と著者に文化遺産から生活信条を伝えようとしたのである。客家の人々の「热情」がいかに

熱いものだったか、想像に難くない。著者が客家の人々と出会い旅で、とくに魅かれたのではないかと思われるが、「3章 家族の肖像」と、「章 仕事と生活」の2章である。3章では、著者にとっての客家像として、旅のアンドントンでしてくれたミリーさんのねに家族とともにある姿を挙げている。また6章で「客家の人たちの働く手は個性的で美しい。この旅は、働く人の手を巡る旅でもあります。」(P.88)と記されているのだが、著者は職人ばかりの人々に手を見てもらい、握手をしていく。手と手がふれ合い、仕事の身体性を感じるというは、大きな喜びであっただろう。パンデミックが収束したのち、こんな風にふれ合える旅ができることを祈る。

さて、「8章 客家の人たちの人生観」では、私が長年通う東勢の風景とカラオケ大会のことが描かれている。じつは、著者は東勢訪問に遭遇し、2日ほど通訳を務めた。いかなる経験も楽しみ、ひとたび音楽が流れるや身を任せ、幸せそうに体を揺らす著者に、町の人々はすっかり魅了されていた。

本書は、1971年に台湾南部で起きた「琉球民遭難殺害事件」を題材にした小説である。平野久美子著『牡丹社事件マブイの行方—日本と台湾、それぞれの和解』(集広舎、2019年)と合わせて読まれたい。

事件の概略は平野氏の書の紹介をご覧いただくことにして、当初友好的であったパイワン族の人々が、なぜ大勢の琉球の漂流民を殺害するにいたったのか、遺族はもちろん現地先住民族の人々にとっても、重く苦しい「謎」として残り続けていることと思う。この「謎」について、台湾東部台東県のブユマ族の出身である著者・巴代は、琉球漂流民とパイワン族との間に、慣習についての誤解と不信が生じ、事件の発生につながったというスタンスで描いている。

最終的には悲劇的な結末を迎てしまうものの、物語の途中では、琉球漂流民とパイワン族の人々が、互いの理解に努めようとする姿が描かれる。実在した人物をモデルにした「野原茶武」は、クワズイモで食べ物を包んだり、酒を飲む前に酒を撒き祈祷したりする(P.166)習慣を知り、宮古島との文化的類似性を認

『暗礁』

巴代／魚住悦子・訳
草風館 2018年 ¥3,080
ISBN: 9784883232024





『族群』
現代台湾のエスニック・
イマジネーション

王甫昌／松葉 隼、洪郁如・訳
東方書店 2014年 ¥2,750
ISBN : 9784497214171

現代台湾社会における「族群（エスニック・グループ）」という概念は、「民主化」や「台灣化」にどのような影響を与えたのだろうか。「原住民族や漢族」「外省人や本省人」「閩南人や客家人」などの関係性をわかりやすく明確に論じた概説書。



『日本語と華語の対訳
で読む 台湾原住民
の神話と伝説』(上)

孫大川・企画／林初梅・編／
古川裕、林初梅・監訳
三元社 2019年 ¥2,420
ISBN : 9784883035014

台湾で教育用教材として編纂された台湾原住民の各民族の創世神話や伝説を、日本語と台湾華語の対訳とし、読み物としても、語学教材としても、台湾華語学習者、日本語学習者のどちらもが使用できるように編集。台湾華語単語リストなども掲載。上巻ではアミ族、ブユマ族、タオ族、パイワン族、ルカイ族を取り上げる。



『大海に生きる夢』
大海浮夢

シャムン・ラボガン／下村作
次郎・訳
草風館 2017年 ¥3,520
ISBN : 9784883232000

ポンソ・ノ・タオ（人の島）蘭嶼に生きるタオ族。舟をつくり、舟を漕いでトピウオを獲り、魚と女たちが育てたイモを主食とする生活を、父や祖父の世代は営んできた。そんな彼らを襲った中国語による学校教育、大型漁船による乱獲と爆薬漁の横行、戒厳令下の1980年代に建設された核廃棄物貯蔵所、急速に進む近代化。タオ族の伝統を取り戻すため、現代の知識人として生きる筆者の社絶な闘う文学。



『日本軍ゲリラ
台湾高砂義勇隊』
台湾原住民の太平洋戦争

菊池一隆
平凡社 2018年 ¥858
ISBN : 9784582858860

植民地台湾の支配・差別構造により戦場へと送り出された原住民「高砂族」は、陸軍中野学校出身の指揮官のもと、どんな特攻を戦ったのか。どんな惨酷な状況を強いられたのか。太平洋戦争の実態を台湾原住民の視点から明らかにする、知られざる戦争の真実。



『日本語と華語の対訳
で読む 台湾原住民
の神話と伝説』(下)

孫大川・企画／林初梅・編／
古川裕、林初梅・監訳
三元社 2019年 ¥2,420
ISBN : 9784883035021

『日本語と華語の対訳で読む 台湾原住民の神話と伝説』の下巻。漢民族と異なり、南島語系に属する独自な言語文化の特徴をもつ台湾原住民族において、代々語り伝えられてきた神話・伝説を日本語対訳で紹介する。下巻では、ブヌン族、サオ族、ツォウ族などを取り上げる。



『少数者は語る』(上)
台湾原住民女性文学の
多元的視野

楊翠／魚住悦子・訳
草風館 2020年 ¥4,620
ISBN : 9784883232048

原住民族であり、女性であるというもっとも弱い立場にある少数者の発言を20年にわたり収集し、分析した楊翠の博士論文の翻訳出版。タイヤル族のリイキン・ユマ、パイワン族のリカラッ・アワー、アミ族の作品分析や、パイワン族のイバオとチベット族のオーセルの比較研究などを収録する。



『植民暴力の記憶と
日本人』
台湾高地先住民と
脱植民の運動

中村平
大阪大学出版会 2018年 ¥5,500
ISBN : 9784872596090

日本植民地統治で青年期まで過ごした台湾先住民の「暴力の記憶」想起と史料の批判的検討から、帝国日本のコロニализムが植民された人々のみならず植民側の歴史認識にも影響を与えてきたことを明らかにする。日本人と台湾高地先住民のコロニアルな出会いの歴史経験を民族誌として詳細に記述し、社会を構成する力と生きる力をコンクート・ゾーンの現場から問い合わせすることで、脱植民運動に「日本人」が参画していく道を切り拓く。



『「外国人嫁」の台湾』
グローバリゼーションに向
き合う女性と男性

夏曉鶴／前野清太朗・訳
東方書店 2018年 ¥4,950
ISBN : 9784497218148

東南アジアから台湾へ毎年何千人とやってくる「外国人嫁」。著者は中国語学習教室の設立など、彼女たちの自立と団結をうながす活動を推進してきた。本書ではその歩みを綴るとともに、貧しい低開発国女性と結婚できない台湾農村部の男性が結びつき、社会問題を生み出しているとの「定説」について、行政職員へのインタビューや新聞・雑誌・テレビ番組の分析をとおして検証する。



『少数者は語る』(下)
台湾原住民女性文学の
多元的視野

楊翠／魚住悦子・訳
草風館 2020年 ¥4,620
ISBN : 9784883232055

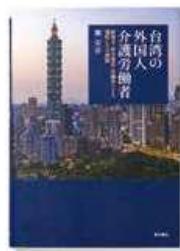
『少数者は語る』の下巻。1996年に現れた台湾原住民女性文学は、20年あまりの間にさまざまなジャンルで豊かに花開いた。散文、小説、詩のほか、オーラルヒストリーなども取り上げ、さらに漢民族などの女性作家も研究対象にして、少数民族の声を聞く。



『台湾原住民族研究
の足跡』
近代日本人類学史の一侧面

笠原政治
風雲社 2022年 ¥3,960
ISBN : 9784894893061

台湾原住民族研究の先駆者である伊能嘉矩、森丑之助、馬淵東一らが蓄積した成果、それはまた日本人類学の骨格にも行き着く濃密な現地／人との交流でもあった。本書は、その後をつないできた著者による研究の「集大成」であり、「温故知新」すなわち研究史の総括・初学者への入門書である。



『台湾の外国人介護
労働者』
雇用主・仲介業者・労働
者による選択とその課題

鄭安君
明石書店 2021年 ¥3,850
ISBN : 9784750352411

接触が難しい女性失踪経験者たちへのインタビューを実施。東アジアでいち早く外国人介護労働者の受け入れに踏み切った台湾の事例をとおして、「強き雇用主・悪しき仲介業者・弱き労働者」の図式では説明しきれない、外国人労働者をとりまく課題を浮き彫りにする。



『山地のポスト・
トライバルアート』
台湾原住民セデックと
技術復興の民族誌

田本はるみ
北海道大学出版会 2021年 ¥7,480
ISBN : 9784832968684

台湾原住民セデックの「織り」とそれに深く関わる諸技術実践に関する民族誌。素材・道具・身体およびそれらの変容も視野に入れ、国家の文化政策に密接に関係しながらも、「消滅から復興へ」という語りに回収されない、より複雑で変化の可能性に開かれた技術的営みを描き出す。

台湾の宗教 悲しくも麗しい島の多元的な祈りの姿

—案内人—
藤野陽平

この小文に取り上げて欲しいという本のリストが企画者から届いたときに、正直、おや？と思った。台湾の宗教だから儒教・仏教・道教、もしくは民間信仰や原住民の信仰世界（以下、「台湾の宗教」と呼ぼう）をテーマにした本が多いのだろうと思っていたのに、多くはなんらかの形での日本との交流を扱ったものであったからだ。近年の台湾関係の書籍に、台湾は親日的である、というイメージにもとづいた日台友好を題材としたものがあふれていることはわかっていたが、あらためてまとめて手にし、読み返してみると、これらの書籍の多くが単に親日台灣という幻想から生み出されたものとは異なり、日本を含めた台湾の外の社会との人の往来に関わっていることに気がついた。

落ち着いて考えてみれば、それもそのはずで、台湾の歴史はさまざま人々がやって来て紡ぎあげられたものである。今日では原住民と呼ばれるオーストロネシア系の人々が暮らしていたこの島に、オランダ、スペイン、鄭成功と明朝、清朝が渡ってきた。その後も近代化とともに欧米文化が流入し、日清戦争後に帝国日本、そして戦後には国民党とともに外省人が移住した。九州ほどの広さの麗しの島に惹きつけられるように多くの人々が上陸し、さまざまな文化を持ち込んだ。これに近年では新移民と呼ばれる主に東南アジアから移住した人々も増加しているし、対岸の大国民党は一國二制度という建前で虎視眈々とこの島を狙っている。文化的背景が異なる人たちが同じ場所に暮らしていく世界観も多元性を帯びるのは、自然の成り行きである。

現代台湾を理解するキーワードに、さまざまな人たちとともに暮らす多元性が挙げられる。なんでもかんでも白黒つけてそれに当てはらないものを切り捨てるのではなく、まさに同性婚の合法化に見られた虹のようにカラフルな社会がいまの台湾が進んでいる方向だ。出自の異なる人たちがともに暮らす方法を確立することが台湾社会の目標であり、グローバル化が進む世界にとっても模範となっている。

しかし、こうした色鮮やかな台湾社会というのは伝統的なものではなく、1987年に国民党による戒厳令が解除されたのちの30～40年の間に徐々に獲得していくものである。

それ以前の台湾史を振り返れば、オランダ、スペインの間の抗争、鄭成功とオランダとの間の戦い、鄭氏政権と清朝との抗争があり、その後も「分類械闘」と呼ばれる出身地ごとの抗争があった。日本との関係では漂着した宮古島民がパイワン族に虐殺されたことを発端とする牡丹社事件、日本が上陸した際の武力抵抗、映画『セデック・バレ』で描かれた霧社事件も忘れてはいけない。何よりこの島に暮らす人々にもっとも深い歴史的なトラウマを与えたのは、国民党独裁政権期の国家暴力だろう。過酷な歴史を乗り越えて現在の台湾ではときに入り混じりつつ、ときに違いを認めつつとも暮らしていく道を模索している。

このような視点から台湾の宗教をめぐる書籍を振り返ってみると、濃淡こそあれ、多くの書籍で、国家権力による宗教への介入とそれに対する人々の祈る姿が描かれていることが浮かびあがる。強大な力を持って押し寄せる国家に対して個人で対抗することは不可能である。自力ではどうしようもない問題に直面したとき、人類は何か超越的な力に救いや助けを求めてきた。台湾に多元的な価値観を持ち込んだ外來者たちは一方で度重なる悲しみも持ち込んだ。そうした重苦しい空気の中で、人々はささやかな平安を祈り続けてきたのだ。私が拙著で取り上げたキリスト教は、アロー戦争後の天津条約で開港したのち、主に長老教会が宣教を開始した（『台湾における民衆キリスト教の人類学——社会的文脈と癒しの実践』風響社、2013年）。帝国主義とともに台湾に伝わったキリスト教は、その後、医療、教育、出版などを持ち込み台湾史は近代という新しい時代に入っていく。台湾が日本の統治下に入る時代になると教会はときに総督府と競合しつつ、一方で協力する関



藤野陽平 ふじの ようへい

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授

東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究员などを経て現職。専門分野は台湾の宗教を対象にした文化人類学、とりにキリスト教を中心として研究している。旅先でふらりと宗教施設に立ち寄るのが好きで、趣味と実益を兼ねたライフソークとしている。この発端は大学3年生のとき。ゼミナールに入ったばかりで予備知識のない真っ白な状態で指導教員に連れられ、台南の董氏いうシャーマンの儀礼を見させられ、「何だ！ これは！」と衝撃を受けたことだった。ハウスマスト・アレルギーがあるので繻音がもうもうと焚かれてる場所は苦手なのだが、好奇心が勝ってしまい、いがらっぽい感じで新しい「何だ！ これは！」を追いかけている。

主な著書

- ・『ホッピー文化論』共著、ハーベスト社、2016年
- ・『モノとメディアの人類学』共編、ナニシヤ出版、2021年

のだが、日本統治期に本願寺に接収されたため、觀音などは後殿に移され正殿には浄土真宗の阿弥陀仏が祀られた。いまでは本殿に祀られているのは觀音に戻っているが、当時の阿弥陀仏も残されており、植民者・被植民者が共有する仏教の中の葛藤の記憶がそこには見いだされる。

台北の西門町の天后宮は日本統治期に真言宗の弘法寺だったために、弘法大師の立像が祀られている。松金が『台湾の日本仏教——布教・交流・近代化』（柴田幹夫・編、勉誠出版、2018年）で報告しているように、日本統治期に仏教寺院だったものが引き続き仏教寺院として使われれば自然であろうが、「廟」の中に「寺」が入り込み道教の廟として利用されている点は興味深く、ここにも複雑な台湾の歴史と祈りの姿を読みとれる（『「廟」の中に「寺」を、「寺」の中に「廟」』を——『古義真言宗台湾開教計画案』の背景にあるもの』松金公正）。

彩やかな現代台湾を考える際、宗教を考える重要性はここにある。移行期の正義の取り組みが進み、白色テロ期の研究が進んでいる。その一方で、この島の人々が何に対して、何を、どのように祈ってきたのかについて寄り添いながら思いめぐらすことも必要だ。大きな政治と表裏一体にならぬ人々の視点に立って考えることを通じて初めて、美しくも悲しいこの島を全体的に見ることができるだろう。

侵入者による危機と人々の祈りの記憶が縦糸と横糸になって編み出された島の歴史の中で、その侵入者を受け入れるだけの包容力も持ち合わせ、侵入者の価値観も引き受けってきた台湾という社会。拒絶するでもなく、迎合するのでもなく、自分たちの世界観に取り込んでいく。いままでこれからも新しい人がやって来た、そのことが開放的で包容力の高い台湾の「島国根性」を持つ祈りの姿をつくってきたと言えるだろう。

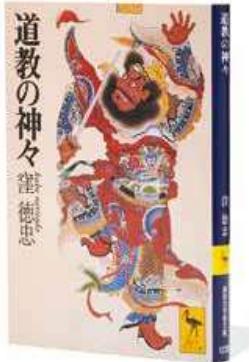
キリスト教以外では、木村が扱った台湾のムスリムも独特な存在である（『雲南ムスリム・ディアスポラの民族誌』木村自、風響社、2016年）。清朝期に泉州から移住した中華系ムスリムがいたが、その子孫たちがイスラームの信仰を今日まで継承することはなかった。台湾にムスリムが本格的に移住したのは戦後の国共内戦時に国民党とともに移住した中国国内のムスリムたちである。台湾ムスリムは中国で「回族」という少数民族とされるが、台湾に渡るとイスラームを信仰する外省人の漢族ということになり、複雑なエスニシティを有している。国民党と行動をともにしたので、当然、国民党を支持する人が大多数である。また、雲南省から移住した人が多く、木村がディアスポラと言うように、台湾にたどり着くまでにミャンマーを経由するなどの移動を経験した人が多いのも特徴である。

日本統治期の台湾仏教は植民者と被植民者に共通した宗教という意味で、独特な立ち位置である。たとえば鹿港の中心的な寺院である龍山寺は觀音を本尊として祀っていた

『道教の神々』

窪 德忠

講談社学術文庫 1996年 ¥1,210
ISBN : 9784061592391



台湾で道教の廟に行ったことがあるという人も多いだろう。台南や鹿港は廟がいたる所にある場所だが、台北でも大龍峒保安宮や行天宮のように観光スポットになっている場所も少なくない。ひとたびその世界に足を踏み入れると天土聖母媽祖や註生娘娘といった優しそうな女神、玉皇上帝や、閻聖帝君のような威厳のある神、中壇元帥や二郎神のような勇ましい武神やその部下たち、齊天大聖（いわゆる孫悟空）のような動物の神様、媽祖の部下である千里眼と順風耳、そして七爺八爺のような恐ろしい見た目だったりユーモラスだったりする妖怪のような神々たちが出迎えてくれる。煌びやかな建築と装飾や線香の香り、お神籠を引いたり獅子舞という道具を使って神意を尋ねたりする人々の姿が織りなす空間の中で、神々の姿をただ眺めているだけでも飽きることはないが、一人ひとりの神様にどういった神話があるのか知ればより深く味わうことができるだろう。

そうしたときにおすすめなのが本書である。前半の道教についての概説的な紹介のあとに、主要な神々の伝説が紹介されている。さながら道教の神話小辞典と

いったところだろうか。もちろんスマホで調べれば大抵の神々の情報は手に入るのだが、従来の神話とは形が変わってしまっているケースも散見される。本書は道教研究の第一人者によるものであるので、情報の信頼性は極めて高い。文庫本になっているので、カバンに忍ばせて台湾道教の世界を見直してみてはいかがだろう。

ただし、本書に載っていない神も少なくない。無数にあるのではないかという台湾の道教の神々、一柱ずつ調べはじめるとキリがないのだが、道教の神話という泥沼に、本書といっしょにはまり込んでしまうのも悪くないのではないか。台湾旅行の楽しみがまたひとつ増えることになるだろう。

『怪と幽』Vol.003 特集 妖怪天国台湾

京極夏彦、有栖川有栖、近藤史恵、乙一、
松村進吉、荒俣宏、小松和彦、諸星大二郎、
高橋葉介、押切蓮介、東 雅夫、加門七海
KADOKAWA 2020年 ¥1,980
ISBN : 9784041080603



「お化け好きに贈るエンターテインメント・マガジン」とうたった第3号で台湾の妖怪の特集が組まれたのだが、20年来台湾の宗教ウォッチャーをしてきた私にとっても、盲点をついた企画だった。というのは私が長期調査を行なっていた2005～2007年には台湾に「妖怪」はいなかったからである。

台湾に妖怪はいなかったというと少し意外かもしれない。しかし、本誌でも「多くの台湾人にとって妖怪という言葉は元々あまり馴染みがなかった」(P.28)と述べられる。それが近年、台湾では妖怪ブームなのだという。もともと日本統治期以降、台湾は日本の妖怪概念が伝わっていたが、国民党の一党独裁が終わり、われわれ台湾人とは何かを考えることができるようになると、台湾にとっての「われわれの妖怪」とは何かを、日本の妖怪の描かれ方を参照しながら考えようになってきたのだという。

本書にはイラストも掲載される(P.14～15)。台湾でもっとも有名な妖怪であり、山に入った人間を惑わせたり、人を騙してゴキブリや牛糞などを食べさせたりする魔神仔、溺れ死んだ人の靈で自分

の身代わりになる人間を探しているとされる水鬼などが掲載されている。なるほど、どことなく水木しげる的な不気味さと可愛らしさとが同居した少し怖いけど会ってもみたい、いっそ友だちになりたいと思わせるような姿を取っている。

そのように言われると、數十年前にキョンシーという妖怪のようなものを台湾映画で見たと食い下がる人もいるかもしれない。しかし、キョンシー（殭屍）は香港映画の影響を受けていて、台湾独自のものとは言い難い。当時の台湾では中国の妖怪が「われわれの妖怪」であったということであり、この30年ほどで日本のメディアの影響を受けつつ独自の妖怪を模索することで妖怪を脱中国化しているとも言える。多元性の中で民族的なアイデンティティをつくろうと試行錯誤を続ける台湾だが、どうやらその動きは彼ら妖怪たちの世界にも広がっているようになってきたのだ。

運命の人とつながっているという赤い糸。日本でも慣れ親しまれたこうした考え方は小説や映画、曲のテーマとして幾度となく登場してきた。日本だけではなく台湾でも漫透しており、月下老人という神様から赤い糸を受け取って祈願すると良縁に恵まれるという。本書を取り上げられる台南の廟のほか、台北の霞海城隍廟も月下老人に縁結びをお願いする人々でごった返しているのを見たことがある日本人も少なくないだろう。

ただし、月下老人の信仰は唐の時代にさかのぼれるものの(P.112～114)、その流行はそれほど古いものではないという。というのも従来の結婚は家族同士が決めるため、本人たちの意思とは関係がなく、それを祈願するという風習も生まれにくかったからだという。本書では日本統治期に自由恋愛が持ち込まれ月下老人を祀る廟が増え、戦後、自由恋愛が減少すると下火になり、再度可能になると増加に転じ、赤い糸の配布も始まったのだと指摘する(P.94～110)。

恋愛觀の変化が縁結びをめぐる信仰に変化を与えたというは台湾だけではなく、日本でも同様だという。今日、縁結

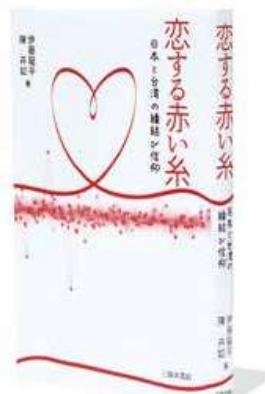
びのご利益があると知られる出雲大社も、2000年代半ば頃から注目されるようになったとされ、女子力や婚活という言葉が流行した時代と重なるのだという(P.10～24)。

赤い糸が紡ぐ運命に期待を寄せる。現代のわれわれにはあたりまえのことだが、家父長制的な価値観が優位な時代には許されず、とくに女性は主体性を奪われてきた。ジェンダーの平等化が急速に進む台湾社会では恋愛や結婚のあり方に於いて熱い議論が繰り返されている。今後、月下老人はどういった人と人を結び合わせ、人々はどういった祈りを月下老人に寄せていくのだろうか。本書をヒントに東アジアの結婚の将来について考えてみたい。

『恋する赤い糸』 日本と台湾の縁結び信仰

伊藤龍平、陳 卉如

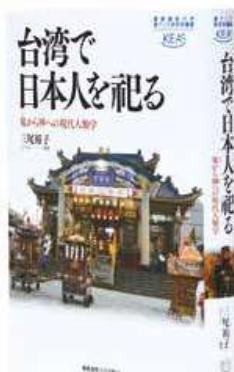
三井書店 2019年 ¥2,750
ISBN : 9784838233526



『台湾で日本人を祀る』 鬼から神への現代人類学

三尾裕子・編著

慶應義塾大学出版会 2022年 ¥5,940
ISBN : 9784766428124



近年、インターネットを中心に、台湾では植民地期の日本人が神として祀られているという話題を見かけるようになってきた。そうした神を日本神と呼ぶことにするが、記事を見た多くの日本人は、台湾が親日的だからと考えがちだし、中にはそれゆえに日本が植民地でしたことは間違っていたのかだという結論に導く人も少なくない。

このような考えを完全に否定するつもりはないのだが、現地の祈りの場面にて日本の植民地统治に感謝しているかいなかいとかいう軸とは別の観點から、日本神は崇拜されている。戦死した日本兵は異常死をしたために、祟りをなす恐ろしい「鬼」というものになっていると考えられている。その祟りを避けるために供養するうちに中には福をなす「神」へと変化するものがあり、これが現在の日本神となっているのだ。

本書では長年台湾の宗教を調査してきた研究者らが、丹念なフィールドワークを通じて明らかにした現地のリアルな祈りの実践が描かれる。そして単に宗教の話に留まるのではなく、植民地主義、脱帝国主義、メディア、観光といった現代



『孔子廟と儒教』
学術と信仰

黄進興／中純夫・訳
東方書店 2020年 ¥5,500
ISBN: 9784497220172

黄進興氏が自ら厳選した孔子廟研究に関する14編の論考を、「黄進興著作選集」として2冊に分けて刊行。第1冊にあたる本書は、孔子の末裔たちが私的に行なう孔子祭祀が、國家の祭祀系統に組み込まれていく過程や、儒家の道統に対する価値基準の変遷などを分析することにより、儒教史・儒學史の変遷を映し出す。さらに、ほかの宗教（キリスト教、仏教、イスラム教）との比較により、儒教の宗教としての特徴を導き出している。



『孔子廟と帝国』
国家権力と宗教

黄進興／工藤卓司・訳
東方書店 2020年 ¥5,500
ISBN: 9784497220189

「黄進興著作選集」の2冊目。いかにして孔子廟が中華帝国の礼制に組み込まれていったか、政治に取り込まれていったかを、孔子廟をめぐるさまざまな歴史的事象を丹念にたどりながら論考する。同時に、孔子廟に從祀される者的人選自体が、そのときどきの時代思潮・学術観、ひいては政治思想を反映するものとしての代表的事例を挙げて論考を加えている。付録として、太公望呂尚を祀る「武廟」についての文章を收める。



『台湾の法教』
間山教科儀本と符式簿の解説

劉枝萬
風櫻社 2019年 ¥8,800
ISBN: 9784894892514

華南一帯の民間信仰の基層をなす巫術・法教。本書は、清末から日本統治初期にかけて勢力のあった閭山（りょざん）教系の一派が相伝した科儀本（儀礼のテキスト）24冊の全貌を紹介。さらにその1冊『符式簿』（123件のおふだ）から、法師の奉じる神仙やさまざまな呪法、儀礼を読み解き、法教の実践を再現。著者の民間信仰研究の到達点を示す大著。



『台湾に渡った
日本の神々』
フィールドワーク 日本統治時代の台湾の神社

金子展也
潮書房光人新社 2018年 ¥3,080
ISBN: 9784769816591

明治28年から昭和20年まで、日本統治時代の50年間に中心に台湾には日本の神々を記る大小の神社が造営された。官幣・国幣の大規模な神社から、学校・企業・軍隊内の神社、移民村や先住民の村々の祠まで、いまも遺跡・遺物が見られる230社の来歴・現状をまとめた初めての本。



『台湾の日本佛教』
布教・交流・近代化

柴田幹夫・編
勉誠出版 2018年 ¥3,080
ISBN: 9784585226888

日台双方の視点から植民地期の布教を再検討する——。1895年から1945年までの日本統治時代に曹洞宗・真言宗・淨土真宗本願寺派・大谷派などの仏教教団各宗派が展開した布教活動に焦点を当てる。従軍布教をはじめ、病気平癒を求める現世利益的な行動のほか、教済・医療・教育・出版など多様な活動を通じて、台湾の産業化・近代化の様相を明らかにする。



『台湾における民衆
キリスト教の人類学』
社会的文脈と癒しの実践

藤野陽平
風櫻社 2013年 ¥5,500
ISBN: 9784894891869

近代化の流れで社会全般に大きな影響を与えてきた台湾のキリスト教へミクロに接近し、台湾の宗教の特徴を逆照射する。さらに、東アジアのキリスト教の特徴を明示し、欧米経由のキリスト教を対照化した上で、真耶穌教会の事例から民衆キリスト教に共通する「癒し」の位相を探る。



『雲南ムスリム・ディアスボラの民族誌』

木村 自
風櫻社 2016年 ¥4,400
ISBN: 9784894892224

19世紀末の雲南のムスリムたちのミャンマー移住を出発点として、その後のタイ、台湾への再移住の足跡を歴史的にたどり、離散して生きる人びとのディアスボラ性（強制的、または自発的に離散した状態）を問い合わせる。彼らのトランシナショナルな社会空間全体を見えた「多現場民族誌」。



『ポストコロナ時代の
東アジア』
新しい世界の国家・宗教・
日常

玄武岩、藤野陽平・編
勉誠出版 2020年 ¥3,080
ISBN: 9784585227199

新型コロナウイルスのパンデミックはかつてない社会的混乱を招いている。日本、台湾、韓国、中国、香港はこの危機にどう対応したのか。都市封鎖や各種の自粛措置、メディア戦略、「新しい生活様式」などの各国の政策から、疫病除けの妖怪「アマビエ」の流行、各宗教の対策まで、メディア、社会、宗教など多様な視点から比較検証。国家と市民社会の関係、社会のゆがみを浮き彫りにし、国境を越えた連帯と共感の必要性を問い合わせる。



『パワースポット・
オブ・台湾』
～台湾の聖殿と神々を
巡る旅～

松田義人
玄光社 2019年 ¥1,980
ISBN: 9784768312452

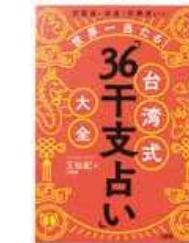
巨大な台湾版ハチ公像、銀行強盗を祀る寺、カップラーメンが食べられる廟——。どこか不思議な台湾の宗教観を直面で紹介し、靈験あらたかなパワースポット216カ所をめぐる旅。さまざまな聖殿と神々をエリア別に掲載し、アクセス情報も収録。Google Mapsに連動する二次元バーコードつき。



『願いがかなう台湾
幸運の旅』
台湾ナンバーワン占い師
が教える、秘密のパワースポットめぐり

龍羽ワタナベ
誠文堂新光社 2017年 ¥1,430
ISBN: 9784416617106

まるで天空に浮かぶような奇跡の寺院、樹齢2500年の神木——。台北市内から、祕境としか思えないディープすぎるスポットまで、台湾在住の人気占い師が、台湾旅行のリピーターにもまだ知られていない、絶対に訪れるべき祕密の穴場「パワースポット」を案内する。コラムも掲載。



世界一当たる!
『台湾式「36干支占い」
大全』

玉仙妃
大和出版 2020年 ¥2,090
ISBN: 9784804763552

生まれ年と生まれ時間で占う台湾式「36干支占い」。古くから台湾、中国の人々の運命を変えてきた最強の占いを初公開する。各干支の基本性格、恋愛運・結婚運・仕事運・金運、健康運を解説。相性表、36干支方位、台湾式厄払いも掲載。切り取って使える目的別符咒つき。

日本社会にとって 「オードリー・タン」 とは何か?

栖来ひかり

これまでオードリー・タンさんに対面で4度ほど인터ビューした。多くが日本の雑誌の依頼だったが、編集部から質問案が送られてくるたび少々戸惑った。たとえば「日本はこれからどうあるべきか?」という国家の問題から「幸せとは何か?」「苦しみを手放すにはどうしたらいいのか?」などのメンタルなものまで。台湾政府の現役要人への質問というより、超能力を備えたシャーマン(巫女)か、はたまた美輪明宏氏の後継者かといった具合だ。実際、日本のいわゆる「オードリー・タン本」の多くに人生相談のようなコーナーを見かけるし、何もわたし自身がかかわった仕事だけの現象ではない。

台湾社会においても「唐鳳」といえば、高いIQとEQに風変わりなバックグラウンドの政治人物として特別視されているのは間違いないが、もう少し人間味があるというか……記者の悪意ある質問に不快感を露わにした姿をテレビで見かけることもあるし、些細なゴシップが書き立てられたり、「唐鳳に脳波を操られる」などのジョークがネットミーム化したりもする身近な存在である。いずれにせよ、台湾の政治舞台の花形として称賛もあれば批判もあり、日本での受け入れられ方はだいぶ違う。そんな訳で「日本社会にとっての“オードリー・タン”とは一体なんなのか?」というのが、わたしにとって大きな謎であった。



『オードリー・タンが語るデジタル民主主義』

大野和基
NHK出版新書 2022年 ¥913 ISBN: 978410886700

デジタルを駆使した市民参加型の新しい民主主義の実践に挑んでいるオードリー・タン。誰でも簡単に政治参加できるプラットフォームの創設や、ひとり1票ではない投票方法の導入など画期的な事例を多数紹介。政治への諦めが漂う日本人に変革の手がかりを示す。



『天才IT大臣オードリー・タンが初めて明かす問題解決の4ステップと15キーワード』

オードリー・タン、黄 壱琪／牧高光里・訳
文藝春秋 2021年 ¥1,738 ISBN: 9784866514543

世界最高の頭脳による問題解決が、この1冊に。あらゆる難題を解決してきた台湾IT担当大臣オードリー・タンの思考法を大公開。「すべての人の側に立つ」という信念、そして15のキーワードから、彼女といっしょに日常生活から社会問題までを考えてみよう。



『天才IT相オードリー・タンの母に聞く、子どもを伸ばす接し方』

李 雅卿／岩瀬恵・訳
KADOKAWA 2021年 ¥1,870 ISBN: 978401112076

著者は天才IT相オードリー・タンの母にして、台湾の実験小学校の創設者。主催した自学習プログラムは、ユネスコから「アジア最高のオルタナティブ教育」と称された。子どもの成長と絡めてきた著者が、子どもの性格や学習の速度に応じた接し方をアドバイス。



『天才IT相オードリー・タン』

アイリス・チュウ、鄭仲嵐
文藝春秋 2022年 ¥1,540 ISBN: 9784163912868

世界に名を馳せた台湾のデジタル担当相には、逸話が多い。IQ180、学歴は中卒、独学でプログラミングを学び、1ページ0.2秒で資料を読む。トランジスタジャー、無政府主義者——。ハンドルネーム“Au”で知られる天才シビックハッカーを徹底解剖する。

台湾の仏教団体がつくった資料の日本語訳を校正する仕事をしていたときだ。台湾でも信者の多い觀音菩薩についての解説を読むうち、オードリーさんが思い浮かんだ。

觀音菩薩とは「觀自在菩薩」または「觀世音菩薩」とも呼ばれ、大乘佛教でとりわけ崇められる菩薩のことだ。世の人々が救いを求める声を聴けばただちに救済し、相手に応じて千変万化の姿で現れ、性別は「無記」——男でも女でもなく性を超越した存在だが、觀音の概念がインドで成立した頃は男性であった説もある。ここでは、生まれたときの身体的性は男性であり、24歳で性別を超越したオードリーさんとイメージがダブる。また、觀音という言葉自体がサンスクリット語で「観る」+「音と声」の合成語であることから、社会のさまざまな立場の人の意見は「音と声」を汲みながら政策や仕組みを洗練させていくが、市民参加型プラットフォームjoinを思わせる。オードリーさんの目指す「誰も取り残さないデジタル民主主義」については「オードリー・タンが語るデジタル民主主義」(大野和基、NHK出版新書、2022年)に詳しいが、觀音様が救いを差し伸べるために持っているいろんな道具、たとえば数珠や宝剣、水瓶はさしつけプロードバンドやフリーソフトウェア、市民メディアやオープンソースといったデジタル・テクノロジーだろうか。となれば、困っている人々の悩みが解消されること=ソーシャル・イノベーションの実現ともいえそうだ。觀世音はかつて「光世音」と書かれていた時代もあり、こうなると「音」「光」はまさにインターネットそのものという感じさえする。仏教思想研究の植木雅俊氏による『法華經』(岩波書店、2015年)では、觀音菩薩とは「あらゆる方向に顔を向けたもの」と訳されている。

仏教の教えをわかりやすく解説する禅・曹洞宗僧侶でエッセイストの佐藤隆定さんによれば「法華經」の第25章「觀音經」の中に繰り返し現れる「念彼觀音力」という一節をどう訳すかで「觀音經」への理解はまったく異なってくるという。「念彼觀音力」は「ねねづね、觀音様の力を念じさえすればあらゆる困難から救われる他力本願として解釈されてきた。しかし、佐藤さんはエッセイでこう説明する。「『念彼觀音力』とは、人間に誰もが觀音菩薩のように生きていくことのできる力が具わっており、その力を自覚して菩薩のごとく生きしていくことを意味した言葉だと私は考えている」。いまの自分を規定するのはいまをいかに生きるかであり、過去に何をしたか、未来に何をするかに拘らない。いかなるときでも自分に觀音様のような力が備わっていると信じ、勇気を持って一瞬一瞬を生き抜くこそ「念彼觀音力」なのだという。

じつは、オードリーさんも「天才IT大臣 オードリー・タンが初めて明かす問題解決の4ステップと15キーワード」(オードリー・タン、黄 壱琪、著、牧高光里・訳、文響社、2021年)で、非常によく似たことを語っている。いわく「人間は『思考



『まだ誰も見たことない「未来」の話をしよう』

オードリー・タン、黄 壱琪／近藤弥生子
SB新書 2022年 ¥990 ISBN: 978415612221

天才デジタル相が現時点で語る、これから末のことと、そのために私たちができること——。デジタル化、ネットワーク化が進む一方、SDGsのような地球規模の課題に直面する世界。オードリー・タンの「誰ひとり取り残さない」メッセージが詰まった1冊。



『だれも取り残さない台湾の天才IT相「オードリー・タン」の誕生』

石崎洋司
講談社 2022年 ¥1,650 ISBN: 9784065275931

8歳で学校に絶望し、不登校。死も考えたギフティッドは、どうして希望を取り戻せたのか? なぜ「誰も取り残さない社会」を目指すのか? ITの天才にして、世界が注目する「新しい民主主義」の旗手、「オードリー・タン」が生まれまるまでの伝記物語。

の運び手に過ぎない「私は今の直前の瞬間まで生き切ったので、次の瞬間ににおける自分の可能性は完全にオープンになっています」。そういう意味では、オードリーさんは觀音菩薩の「化身」というより、佐藤隆定さんの解釈における念彼觀音力の「実践者」と言ったほうが相応しいかもしれない。

以上はわたしの個人的な感じ方でしかない。しかし、これを機に日本社会にとって「オードリー・タン」とはどういう存在かを考えることで、見えてくる日本の新たな侧面があるよう思う。

幸いなことに、『天才IT相オードリー・タンの母に聞く、子どもを伸ばす接し方』(李雅卿、KADOKAWA、2021年)などオードリーさんの御母堂・李雅卿さんの子育て本も含め、そのための書籍は続々と刊行されている。2020年より版を重ねている『Au オードリー・タン——天才IT相7つの顔』(アイリス・チュウ、鄭仲嵐、文藝春秋、2022年)は、台湾のベテラン記者/編集者が手がけただけに、オードリーさんの生い立ちとともに台湾の社会背景にも理解が深まる1冊である。また、オードリーさんへの拙インタビューが収録された共著『東アジアが変える未来』(Voice編集部、PHP新書、2021年)は、日本でまだ馴染みのない概念「熟議民主主義」が台湾でどう進んでいるかや香港のこと、また2020年に亡くなった李登輝元総統についてもじっくり語ってもらった。手前味噌だが、オードリーさんのみならず台湾のたどってきた道程について少しでも日本のみなさんに伝えられたらと苦心した。手に取っていただければ嬉しい。

クリスマスを祝い、年が明ければ神社に参り、死ねば仏教の戒名がつく日本人の多くが「無宗教」と言われて久しい。しかしながら、日本社会を憂い、なんとかよい方向へ変化させたいと願い、そのために自分は何ができるのか。日本の人々が自身に投げかける勇気ある問いかけ、それがいまのオードリー人気として表れているとも思える。そう考えれば、書籍をとおしてその生き方に触れた人々がこれからつくる日本社会も捨てたものではないのではないか、そんな希望が芽生えてくるのだ。

栖来ひかり
すみき・ひかり

文筆家、道草者



2006年より台湾在住。台湾の文化・芸術・社会・歴史・政治と多様な分野を草稿しつつ筆算している。街歩きをよくなく愛し「ブランマモリ」。台湾編が実現することを夢見ている。オードリー・タンさんへのインタビューは、頭の回転と隙のスピードが速すぎていていけなかたり、原稿をまとめる際に1個ずつの事柄を読み解いて消化するのに非常に骨が折れたりなど苦労が多い。今回気づいたのは、多くの本にタイトルや書くふくめ「IT相」とあること。これについて、ITが科学技術を指すことに対してデジタルは人と人をつなぐツールなので「IT大臣ではなく、デジタル大臣」と書いて欲しい」とは前回インタビュー時の御本人の言。今後の出版の参考になればと思う。

- ・『台湾と山口をつなぐ旅』西日本出版社、2018年
- ・『時をかける台湾Y字路』記憶のワンダーランドへようこそ! 図書出版ヘレカ、2019年



アジアの LGBTQ／ジェンダー平等先進国 —虹色に染まる多様「性」の島—

—案内人—
鈴木 賢

台湾では2019年5月24日から同性カップルにも婚姻を成立させるための法律が施行された。同性婚の法制化は2001年のオランダに始まり、すでに世界では31カ国で同性カップルも結婚できるようになっているが、アジアでは台湾がトップでゴーループを切った。同性婚法の施行から丸3年を経て、合計で8,210組（女性同士5,797組、男性同士2,413組）の同性カップルが婚姻届を出して、婚姻を成立させてている（2022年5月末）。この法律が成立するまでの過程において、そしてとりわけ法律施行後、台湾社会ではいわゆる「同志」についての話題を日常的に見聞きするようになっている。台北の街角、地下鉄ホーム、大学キャンパスなど、あちこちで女性同士、男性同士のカップルが何気なく手をつないで歩く姿を目にする。若者の街、西門町のMRT駅前の車道は、台北市が「同志」を歓迎することを象徴するように、6色のレインボーバーに塗装されている。しかし、台湾がもともと「同志」にフレンドリーだったわけではない。

「同志」とは台湾から大中華圏に広がった華語で、いまや香港や中国本土でも通用している用語である。当初、香港の映画人が1990年代初めに同性愛者やqueerなどを意味する言葉として使い始めたものであるが、台湾ではこれを‘90年代の半ばに移入し、性的多様性を旗印にした社会運動の主体を意味する政治的意味合いを付与するようになった。「同志」には同性愛を想起させる「同」が含まれ、孫文以来、党内で仲間を呼び合う語として、中国国民党や中国共産党周辺で広く使われてきた、もともとは日本語から取り入れられた政治用語である。中国では「習近平同志」のように政治的な志を同じくする者という意味での用法が健在である。

「同志」にはじつは明確な定義はない。同性愛、両性愛、性自認と身体の性が一致しないトランスジェンダー、性別分化が中間的なインターフェクシャル、さらにはアイデン

ティティを脱構築したクィア、ノンバイナリーなど、性にかかわる多様な主体をなんでも包含しうる便利な「収納工具」なのである。反本質主義的で、硬直したカテゴリーを解体する機能を備えた用語なので、定義されることを拒否しているとも言える。

「同志」は長い間、社会の片隅で密かに隠れて暮らすことを余儀なくされ、公的なテーマとして人々との口に上ることなどまずなかった。そうした台湾で「同志」を公的な空間へと導いたのは文学作品であった。「同志文学」のバイブル的存在としてもっとも著名なのは、1983年に単行本化され、繰り返し映画やテレビドラマ、舞台劇にもなった白先勇の長編小説『孽子』（陳正醍・訳、国書刊行会、2006年）である。この作品は1970年代の台北でうごめく男性同性愛者たちのコミュニティを描いたもので、日本語をはじめ、英語、フランス語、ドイツ語などにも翻訳されている。‘90年代に入り、「同志」を描いた小説、ノンフィクションなどの作品が次々と公表され、各種文学賞などを獲得した。

台湾に「同志文学」という文学のジャンルが確立したことは、政治の民主化を遂げつつあったこととともに関係がある。ようやくマイノリティが主流派とは異なる自らの物語を語る空間を与えられ、それが正当に評価される時代を迎えていたのである。1987年に戒厳令が解除され、1996年には李登輝が最初の直接選挙で当選し総統に再任された。この頃、環境、消費者、老兵、女性、先住民族など、諸分野で社会運動が生起し、活発な社会運動の時代を迎えていた。‘90年代に入り、この波がようやく「同志」にも及ぶようになり、「同志」の組織化が進み、「同志運動」が立ち上がる。

よちよち歩きの「同志運動」はまだカミングアウトのハーダルが高く、顔をさらして活動することが困難だったこともあり、女性運動家の影に隠れるようにして、表の社会へと出て行くようになる。2004年にはフェミニストたちの



鈴木 賢 すずき・けん
明治大学法学部教授

北海道大学法学部教授を経て現職。専門分野は台湾、中国の法律。とくに性をめぐる法律問題。2022年度は台湾大学法律学院で客員教授として在外研究中。日本植民地時代を含む台湾の法律史を確立した王泰升著『台灣法律史概論』（元照出版）を日本語に翻訳することに没頭（予定）。台湾各地で開催される同志パレード（LGBTQ ブラッド）に参加するのもおおいに楽しみ。週末は西門町紅樓裏のオープン・テラスバーで台牌（台湾ビル）をグイ。

- 主な著書・論文
- ・『台湾同性婚法の誕生——アジア LGBTQ+ 燈台への歴程』日本評論社、2022年
 - ・「比較法から吹く風は日本法を変えるのか——同性婚の法制化を例として」法学セミナー 792号、2021年、P.20～26
 - ・「台湾の大法官による憲法解釈制度の概要と運用」筑大法學 104号、2021年、P.75～90

すでに半数を超える（51.3%）にいたっている（2021年）。

このように公的部門で女性が極重要なポストに就いている例が目立つが、男女の収入の格差も日本などと比べれば格段に小さい。日本では男女の収入差は31.9%もあるが、台湾はわずか14.2%に過ぎない（2019年）。これは18.5%のアメリカよりも小さい。高等教育を受ける女性が多くなっていることも成因のひとつである。台湾では学士課程卒業者では52.8%と男性を凌ぎ、修士課程では45.1%、博士課程では33.2%（いずれも2018年の卒業生）と、女性の高学歴化が進んでいる（日本はそれぞれ46.2%、33.9%、30.5%と台湾よりも低い）。

台湾はこのように長年の努力の末、すでに日本をはるかに凌ぐジェンダー「性別」平等先進国になっている。同性婚も婚姻における性による差別の解消、すなわち「婚姻平權」（婚姻平等化）という理念のもと取り組まれた。性別平等はエスニックグループ（族群）、言語、人種、宗教、文化などの多様性と並んで、台湾を台湾たらしめる重要なアイデンティティのより所ともなっている。

コロナ禍の中、デジタル担当大臣として手腕を発揮したオーデリー・タン（唐鳳）は、その能力、見識、実績において日本では評価が高い。彼女はトランジンジェンダーにして、なんと35歳にして入閣（行政院政務委員）を果たしている。また、終局の憲法解釈権を握り、民法を違憲として婚姻平等化を決定づけた憲法裁判所の大法官でも、黃昭元（台湾大学教授）氏は、54歳の若さで大法官に就任している（2016年）。これに対して日本の最高裁判事では64歳以上にならないと任命されないのが慣例である。台湾では若年者でも能力のある者なら、どんどん抜擢し、重要なポストに就ける傾向が顕著である。

多様性と若さにあふれ、マイノリティの人権を尊重する島、台湾。台湾が魅力的な理由はここにある。

尽力により性別平等教育法が制定され、早くも性差別問題の中に性的指向による差別やいじめの禁止を規定し、多様な性を義務教育で教えることを盛り込んだ。2007年には性別勤務平等法を制定し、職場での性的指向による差別禁止（罰則を伴う）を明記した。こうして2000年代には多様な性の問題が、法律に取り込まれて政治化されていった。「生理性別」（sex）による差別問題の延長線上に、ジェンダー、性的指向、性自認や性的特徴など多様な性の問題を「性別」という台湾華語に創造的に包含させていったのである。

台湾では早くからジェンダー主流化が政治の中心課題に位置づけられ、性差別の解消が社会全体のテーマとして取り組まれた。その結果、いまでは国際的に見てもジェンダーギャップの小さな国になっている。世界経済フォーラムが公表しているジェンダー・ギャップ指数では、台湾は含まれていないが、同様の指標を用いて台湾行政院性別平等處が独自に算出した結果が公表されている。2020年のデータによれば、153カ国の中で台湾は29位にランキングされ、近隣の中国107位、韓国109位、日本122位（台湾を加えたので、順位をひとつずつ下げている）をはるかに凌ぐスコアを出している。

周知のように台湾の最高政治指導者、総統は2016年以後、蔡英文（女性）が務めているほか、国会議員（立法委員）113名のうち、現在、女性議員が47名、約42%を占め、アジアでは最高、世界では16位に位置している。比例代表では各政党の当選者が男女同数になるように制度上、義務づけられている（アファーマティブ・アクション）ことが大きく作用している。また2018年の統一地方選挙では22ある県市（地方自治体）のうち7県市で女性首長が誕生している。近年は司法官試験ほか各種国家試験では女性の合格者がむしろ男性を上回るまでになり、その結果、大法官以下、裁判所に勤務する全裁判官のうち、女性判事が

ファンスースー 『房思琪の初恋の楽園』

林 奕含／泉 京鹿・訳
白水社 2019年 ¥2,200
ISBN : 9784560097007



冒頭から「これは実話をもとにした小説である」とのひと言から始まる台湾社会に大きな衝撃を与えた長編小説である。ジェンダー平等をある程度達成したかに思える台湾でも、隠されたところに性暴力が日常的に蔓延し、いかに多くの被害者が声を上げられずに埋もれているかを知らされる。一見、この物語は「誘惑された、あるいは強姦された女の子」(思琪)の悲劇の物語のように見える。しかし、著者、林奕含はインタビューでカリスマ国語教師の「強姦犯(林国華)」を愛した女の子の物語だと語っている。性的暴行を受け続けた主人公、房思琪が精神に異常をきたし、精神病院に入院したと重ね合わせるように、著者はこの作品の出版からわずか2ヵ月あまりあと、2017年4月27日、自宅で自死を遂げてしまう(享年26)。

この小説は2017年2月の刊行当初から大きな反響を巻き起こし、著者が命を絶ったときにはなんとすでに5刷を重ねていたという。台湾最大のネット書店、博客來books.comではこの年の第1位になり、台湾を代表する全国チェーン書店、誠品書店では年間ベストセラー第3位と

なった。学歴社会、権力関係、暴力、性的光と影という東アジア社会に共通する構図を描いたことから、中国や韓国でも多くの読者を得たといふ。とくに中国の簡体字版は100万部を突破した。著者が受けた性暴力の実体験が描かれているのではないかとの疑惑が持たれ、加害者である林国華は誰かを詮索する騒ぎも起きている。私のように文学に疎い無縁者が、軽率に単純化してこの作品を評するのが憚られるほどに、繊細で優美で周到に意を尽くした暗喩に満ちた作品である。華語文学翻訳ではすでに定評のある翻訳家、泉京鹿による訳文も秀逸で、原著の魅力をよく伝えていると感じられる。

台湾がLGBTQにフレンドリーな社会になるはるか前、社会の全員が異性愛者であることを暗黙の前提とする社会にも、レズビアン(本人がそうした自觉を持っていたかどうか別として)は確かに存在していた。女性を愛する女性の人生を、その娘の目線から描いた自伝的な手記『私と私の男っぽい母さん』を邦訳したもののが本書である。この本の元となつたのは、筆者の黄惠偵さんが自ら監督として撮影した『日常対話』というドキュメンタリー映画で、この映画は2017年ベルリン国際映画祭ティーピー賞、台北映画祭最優秀ドキュメンタリー賞を獲得、2021年には日本でも上映された。この映画の日本上映に尽力した小島あつ子氏の手によって邦訳された。

LGBTQと言えば、どこか若者に特有な現代的な現象かのように思われるがちである。娘や息子がLGBTQであるという話はわりとありふれている。しかし、本書は娘が女性を愛する女性としての母を描いている。母、父、妹、母が愛した女性たち、そして自分自身に焦点を当てながら、筆者自身が母になるまでの人生を振り返る。筆者の母は、普通に男性と結

婚し、ふたりの娘をもうける。そして夫からの(性的を含む)暴力の限りを尽くされ(筆者も父から性的被害を受けていた)、ついに娘ふたりを連れて家を出る。その後は葬式の際に歌舞伎曲を奏でる樂團一座を率い、母自身は紅頭法師を務め、娘たちも一座に加わり奉立歌を唱いながら育てられる。

そうした中で娘たちの周辺には、次々と母のガールフレンドが現れては、消えてゆく。母はそうしたガールフレンドたちにはとびきり優しく接していたため、そのことが筆者を不安にさせました。自分は母から愛されているのか、捨てられるのではないかと。レズビアンの子としてつらい目に遭ってきたのは、「母が同性愛者だからではなく、母が同性愛者であることに対する世間の偏見が原因だ」と、「あとがき」での本質を突く指摘にはっとさせられる。

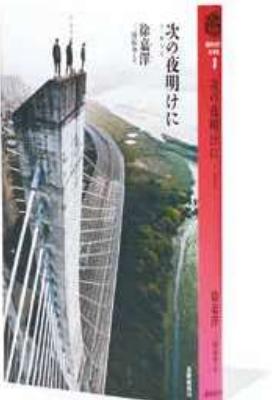
『筆録 日常対話』 私と同性を愛する母と

黄 惠偵／小島あつ子・訳
サザンブックス社 2021年 ¥2,750
ISBN : 9784909125309



『次の夜明けに』

徐 嘉澤／三須祐介・訳
書肆侃房 2020年 ¥2,090
ISBN : 9784863854161



著者の徐嘉澤は1977年生まれの気鋭の作家である。デビュー作『窓』(基本書坊、2009年)以来、ゲイを題材にすることが多いことから「同志文学」の旗手のひとりと見なされている。3世代の父子の生きざまが、戦後台湾史の流れの中に重ね合わせに綴られる本書は、『下一個天亮』(大塊、2012年)の邦訳である。

国民党政権の遷台後、白色テロと呼ばれる大規模政治弾圧の歴史となった二・二八事件当時(1947年)、新聞社で日本語ニュースを担当していた父が第1世代として描かれる。上司や同僚が投獄されいく中、気が触れてしまい廃人同様の状態になってしまふが、最後のほうではじつは彼が同僚たちを告発する役割を担っていたことが判明する。その息子の平和と起義の兄弟が第2世代。平和は公理と正義のために働く弁護士、起義は反政府系雑誌社勤務を経て、現在の政権党の民進党の結成に参加する反体制運動家として活躍する。起義の息子の哲浩が3代目で、台北で教師をするゲイという設定である。

戦後に起きた野いちご運動、ダム建設、ハンセン病施設の強制移転、外国人労働

者問題、LGBTパレードなどさまざまな社会運動への関与が描かれ、父子3世代の人生が戦後台湾史をなぞるように展開する。読者をして台湾では社会運動がいかに身近で大きな出来事であったかを追体験させてくれる。政治的にはリベラル派のはずの父、起義ですら、息子、哲浩がゲイとして生きようとして受け入れられないといった世代間のギャップが描かれていて、台湾における性別平等の進展がごく最近、生じたに過ぎないことを教えてくれる。

訳者の三須祐介はほかにも胡淑斐『太陽の血は黒い』(あるむ、2015年)、台湾文学ブックカフェ3短篇小説『プールサイド』(作品社、2022年)など、精力的に訳業を重ねている。華語文学や華語、台湾社会についての基礎がしっかりしているので、翻訳には信頼がおける。台湾同志文学の日本への気鋭の伝達者として期待される。

なぜ台湾がアジアで初めて同性婚を法制化するにいたったのだろうか。本書はこの問い合わせるべく、台湾がたどってきた社会、文化、運動、政治の文脈を丁寧に読み解いた著作である。法学者が書いたものであるが、性をめぐる社会変動のドキュメンタリーとしても読むことができる。法の専門家ばかりではなく、一般的な市民、そしてLGBTQの当事者たちをも視野に入れた、専門書と一般書の中間的性格を持つ。現在、日本でも提起されている同性婚訴訟の裁判官や立法権を握る国会議員に向けて、婚姻権問題が同性愛者にとっては尊厳の回復を賭けた闘いなのだとことを伝える。

台湾では裁判、立法院での法案審議、憲法裁判所(大法官)の憲法解釈、国民投票、そして最終的な特別法制定と、ありとあらゆるチャンネルを駆使して同性婚法制化が模索された。それぞれの場面で、賛成、反対両派による公開の場での討論が辛抱強く繰り返された。5%強のキリスト教徒がいる台湾では反対運動も強烈に展開され、同性婚を阻止しようとする死の抵抗を続けた。他方、婚姻平等を

広い市民の支持のもと、血みどろの闘いを戦い抜いた。言葉によるバトルがいかに繰り広げられたかが臨場感を持って描かれている。

また、同性婚法が施行された台湾では何が起きているかについて書いていることも、これから同性婚問題に向き合うことになる日本にとって参考になる。淡々と毎月、同性間にも婚姻が成立し、市民の意識は同性婚を受け入れる方向に変わっていること、残された不平等(同性婚未承認国籍の外国人との同性婚や共同養子縁組)について訴訟が提起され、是正されようとしていること、トランジンジャーへの关心が高まり、性別取り扱いの変更要件についても当事者の決定を尊重する判決が出ていることが紹介される。同性婚を法認するとはいかなることなのか。台湾の経験を伝えるパワフルな1書である。

『台湾同性婚法の誕生』 みち アジアLGBTQ+社会への歴程

鈴木 賢
日本評論社 2022年 ¥4,070
ISBN : 9784535526334





『向日性植物』

李屏瑤／李琴峰・訳
光文社 2022年 ¥1,980
ISBN: 9784334914783

台北の女子校に入った私は先輩の小説と惹かれて、戸惑いながらもつき合うことに。小説には親の無理解で入院させられたいた元恋人・小莫がいた。小莫が復学してくると、ふたりは別れる。時は流れ、小説と小莫は渡米。その後、小莫から「心臓手術のため帰国する」と連絡が。小説も帰国したが、小莫は亡くなってしまった——。台湾で異例のベストセラーとなった新時代のレズビアン小説が、芥川賞作家・李琴峰の薦高い翻訳で登場。

『君の心に
刻んだ名前』

湛藍／大洞歎史・訳
幻冬舎 2022年 ¥1,760
ISBN: 9784344039063

「どうしてずっと笑ってるんだ。もしかして、俺と出会ったからか?」。家族からのプレッシャー、社会の偏見や差別の中、全寮制のカトリック系男子高校に通うアハンと転校生のバーディは、胸が張り裂けるような恋に落ち、特別な愛情に戸惑いながらも青春を謳歌する。しかし、学校が男女共学になったことでその微妙な関係が狂い始め——。アジアで初めて同性婚を法制化した台湾で異例の大ヒットを記録した長篇小説。

『台湾女性研究の
挑戦』

野村鮎子・成田静香・編
人文書院 2010年 ¥3,960
ISBN: 9784409240885

台湾学術界の第一線で活躍する気鋭の女性研究者による台湾女性史およびジェンダー研究の翻訳論文集。研究意義や歴史的背景、現在の研究状況をより明確にするため、各篇の最後に日本の研究者による「解題」を収録。台湾のジェンダー研究の歴史背景や現況が概観できるだけでなく、日本と比較した彼我の違い、共有する課題を明らかにする。

『「性／別」攪乱』
台湾における性政治

何春蘋／館かおる・平野恵子・編／大橋史恵・張瓊容・訳
御茶の水書房 2013年 ¥4,180
ISBN: 9784275010551

ボルノグラフィ、セックスワーク、トランジンジャー。近年、台湾において注目された事件とその展開を取り上げた、何春蘋による講義録。本講義はジェンダー研究センターによって全5回にわたり開催されたもので、何春蘋へのインタビュー、書き下ろし論文、コメントーター報告なども収録。

『あまりに野蛮な』
(上下巻)

津島佑子
講談社文芸文庫 2016年 各 ¥1,870
ISBN: 9784062903165 (上巻)
9784062903172 (下巻)

台湾に暮らした日本女性の愛の日記。長い時間が経っても、たどり着けない悲しみ。やがて物語は、深く静かに感動の海にすいこまれてゆく。わたしたちは、それぞれに示されている道をたどり「人類のいたるべき所」に向かい。わたしたちの時間は、死によつてしまひじられない。津島佑子渾身の純文学長篇小説、初文庫化。上下巻。



『惑郷の人』

郭強生／西村正男・訳
あるむ 2018年 ¥2,530
ISBN: 9784863331471

その年、李香蘭が台湾公演に来た。その年、日本は戦争に負けた。その年、ブルース・リーがこの世を去った。その年、日本は経済大国になった。その年、彼らはみな17歳だった。未完の日台合作映画に魅入られた少年たちの流転の軌跡。映画『多情多恨』に導かれるように、70年の時空を往来して少年たちのもつれた記憶が解き明かされる。周縁の人生を幽明のあわいに描く長篇小説。

『ジェンダーと
セクシュアリティで
見る東アジア』

瀬地山角・編著
勁草書房 2017年 ¥3,850
ISBN: 9784326602988

2000年代以降の東アジアの性、家族、社会に、気鋭の研究者が新たな視角から切り込む。東アジアの急激な少子化は20世紀には想像できないものであった。日本、韓国、台湾、中国、北朝鮮、これらの社会では、何が共通で、何が異なるのか、そして何が変わったのか。ジェンダーとセクシュアリティの側面から比較し、日本の「特殊性」をあぶり出す。最先端の研究が切り拓く日本の、そして東アジアの「性」をめぐる課題とは。

『東アジアの結婚と
女性』
文学・歴史・宗教

仁平道明・編
勉誠出版 2012年 ¥2,640
ISBN: 9784585226239

「元始、女性は実に太陽であった。真正の人であつた。今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である」。平塚らいてうが『青箱』創刊号に寄せた言葉は、女性が置かれた現実と哀しみから発せられた嘆きの言葉でもあった。その言葉が典型的な形で現れる場である結婚について、東アジア（日本、韓国、中国、台湾）の女性の結婚を語る文学、背景にある歴史・思想・宗教。そして現在から展望する。

『近代台湾女性史』
日本の植民統治と
「新女性」の誕生

洪郁如
勁草書房 2001年 ¥10,450
ISBN: 9784326601479

『台湾女性史入門』
台湾女性史入門編纂委員会・編

人文書院 2008年 ¥2,860
ISBN: 9784409510612

歴史に翻弄された女性たちが、セクシュアリティやジェンダーをどのようにとらえ、さまざまな困難を乗り越えようとしてきたか。婚姻、教育、政治から、文化、芸術、そして原住民まで、計72のトピックを台湾のジェンダー研究者が最新の成果をふまえ解説。戒厳令解除後の民主化とフェミニズム運動の盛り上がりを経て初めて可能となった、日本はもちろん台湾本国においても稀な女性史「発見」の試み。

『女たちの
ポリティクス』
台頭する世界の女性政治家たち

ブレイディミカ
幻冬舎新書 2021年 ¥990
ISBN: 9784344986237

近年、世界中で多くの女性指導者が生まれている。アメリカ初の女性副大統領となったカマラ・ハリス、コロナ禍で指導力を発揮するメルケル（ドイツ）、アーダーン（ニュージーランド）、蔡英文（台湾）ら各国首脳たち。政治という究極の「男社会」で、彼女たちはどのように闘い、登りつめていったのか。その政治的手腕を激動の世界情勢とともに解き明かす。「女たちのポリティクス」はどう在るべきか。その未来も照らす1冊。

日本の植民地統治は台湾社会に何をもたらしたのか。加害・被害の究明や善悪の評価ではなく、植民地社会の文脈の内側からその軌跡を解説しようとする台湾社会論。1920年頃から現れた、縛足を解き、日本による新式教育を受け、主として高等女学校卒業生から構成される「新女性」。新女性の誕生、植民地女子教育の展開、新エリート家庭の形成、婚姻形式の変化などを追いかね、植民地社会の変容を明らかにする。